



TOPIC
1

高年次教養セミナーを受講してみませんか part 2

令和3年度後学期の高年次教養セミナーは、2月4日（金）に全5回の講義を終了しました。例年より受講者の学生が多く、先生を取り囲んで、講義やディスカッションを行うことができました。今回は、令和3年度後学期に行われた講義の一部概要をご紹介します。

第1回：10月15日（金）

田中嘉津夫先生（元工学部）

「常陸国うつろ舟奇談－SFと民俗伝承の狭間」

田中先生のご専門は電磁気学です。オカルトを信じてのめり込んでしまう学生を救いたいお気持ちから、「うつろ舟」の研究を開始されました。UFOに似ている乗り物が描かれている曲亭馬琴『兎園小説』、長橋亦次郎『梅の塵』など多くの古文書を読み解き、出現したとされる土地には足を運んで検証されるなど、緻密な研究を長年続けておられます。田中先生によると、うつろ舟の話は架空の話だが、このような話を作る社会情勢や事件があったと考えられるとのことでした。



第2回：11月5日（金）

光永徹先生（応用生物科学部）

「天然物化学への招待～薬と毒は紙一重～」

みなさん、ウコンや葛根湯を服用したことはありますか？これらは根茎を利用した生薬で、ウコンは健胃薬、葛根湯は感冒の初期症状の対処療法として用いられています。しかし、薬用植物は、ヒトや動物にとって、毒にもなりうる場合があります。光永先生にはトリカブトやベラドンナ（美しい貴婦人と呼ばれる多年草）などを事例に、天然物が持つ薬と毒の部分について解説していただきました。講義の最後には、科学者倫理をしっかりと学び、社会に貢献していくことの大切さを教えていただきました。



第3回：12月17日（金）

大平幸子先生（医学部看護学科）

「社会問題から心の健康を考える」

大平先生には、現在の様々な社会問題を例に、日本人の心の健康についてお話していただきました。令和2年1月からコロナ禍に見舞われたことがきっかけとなり、日本社会の病理が見えてきたそうです。その1つが、マスク警察などに見られる同調圧力です。日本人は他者への寛容さに乏しく、自分と合わない人は異分子として排除し、正義の押しつけをすることがあるということでした。正義を押しつけることで、脳からドーパミンが出て快樂が得られるのだそうです（特に年配の方は加齢による脳の前頭葉の衰えで、正義を押しつける場合がある）。「自分は当てはまるかも知れない」と思った人は、気を付けて毎日を過ごしたいですね。



第4回：1月21日（金）

高木朗義先生（社会システム経営学環）
「協働と共創のまちづくり」

「まちづくり」と聞くとインフラ整備を思い浮かべますが、高木先生がおっしゃるまちづくりは、自分の生活や地域における身近なことをビジネス化（ソーシャル・ビジネス）することにより、それが大きな環となってまちづくりにつながるというものでした。なんと、岐阜県内には、小学校生活の楽しいところを小冊子にして自費出版した小学生がいます。人の役に立ちたいという気持ちだけで始めたことが、話題となり、小冊子は増刷を重ね、ビジネスとなって、かなりの収入を得ているとのこと。日常の何気ない出来事の問題解決がビジネスやまちづくりにつながる事例を聞いているうちに、「関係者全員が幸せになれる。こんな素敵なことはない」と思い、笑顔になっていました。みなさんも身の周りのことで起業して、まちづくりをしてみませんか？



第5回：2月4日（金）

内海志典先生（教育学部）
「答えが1つでない問題にどのように答えをだすのか。」

今回は事前に、人工肉について考える課題が出されました。講義では、人工肉を食べることに賛成する人と反対する人が混在したグループで、各自インターネット等で調べてまとめた資料をメンバー全員に配り、内海先生が作成した資料も踏まえて情報を厳選しながら、「人工肉を食べることに賛成か、反対か」について、ワークシートをもとに「個人、環境、コスト」の3つの視点で議論を深めていきました。特に、人工肉を食べたことがある複数の学生は、身近な問題として考えやすかったようです。ある学生は、「人工肉はあっていいけど、本物の肉も食べたい」と話していました。今後、さらに技術が発達し、人工肉や培養肉の美味しさや安全性、見かけや価格も実際の食肉と遜色ないレベルになったとき、私たちはこれらの肉をすすんで購入するようになるのでしょうか…。



令和4年度、高年次教養セミナーは、開講5年目を迎えます。令和4年度前学期も引き続き、先生方には個性あふれる魅力的なテーマで講義をしていただきます。

- 第1回：4月15日（金）横山剛先生（高等研究院）「インド仏教と存在論」
- 第2回：5月13日（金）福井博一先生（岐阜大学名誉教授、元応用生物科学部）「世界を繋ぐバラの魅力」
- 第3回：6月10日（金）アレクサンドラ・フォン・フラクシュタイン先生（地域科学部）「児童書からドイツの政治を少し知る」
- 第4回：7月8日（金）高橋周平先生（工学部）「飛行機はどこまで速くなるのか？」
- 第5回：7月29日（金）大矢豊先生（工学部）「組成が一定ではない酸化物と酸化物半導体」

前学期が始まる頃には、全学共通教育棟1階玄関周辺にポスターを掲示する予定です。1～2年生や受講済の学生でも興味がある人は、是非、聴講に来てください。（清島 絵利子）

TOPIC
2

令和3年度基盤教育センター自然科学部会主催 FD・SD

令和3年度、自然科学部会はFDをzoomで開催した。以下はその報告です。

演題：秋からも、読書して

講師：金子美博氏（自然科学部会長、工学部電気電子・情報工学科情報コース准教授）

開催日時：令和3年9月1日（水）14時45分から16時15分

参加者数：65名

内容：前半は、講演者の読書歴から始まり、借りる派に至った経緯が紹介された。次に、図書館利用サイトのカーリル <https://calil.jp/> を使って、一冊の本を取り上げ、実際に図書館から借りるまでの顛末が紹介された。読書には、集中力を高める効果があるだけでなく、語彙を豊富にし、日常会話を豊かにするなどの副産物があることが説かれた。

後半は、理系研究者向けに、Google Scholar®での学術論文検索の話が紹介された。私淑に出逢えるまで、調べたい内容の論文検索を繰り返すことが薦められた。最新の研究論文を読みこなすためには、温故知新で過去の関連論文を読み重ねること、読めない・理解できないとなれば更に過去に遡り、読める論文に出逢うまで根気よく探ることが説かれた。そして、読める論文に巡り合ったら、Google Scholar®の引用元機能を使って、過去の未来つまり現在に帰ってきて、改めて最新の論文にトライすることが説かれた。

前半と後半は一見別々の話のように聴こえるが、講演者が敬服する研究者の方々から伝わる論文に関わる姿勢は無類な読書好きに通じるものがある、という所感でまとめられた。最後に、名古屋方面から本学に通っている方に向け、駅構内にある岐阜市立図書館と一宮図書館の積極的な活用が提案された。質疑応答では、学生だけでなく、図書館関係者からも質問があり、手前味噌であるが、少なくとも講演者本人には大変有意義な講演であった。

世情により自宅待機の時間が増えた方々には、読書の時間もまた増えることになれば、との思いで講演いたしました。（金子 美博）



TOPIC
3

第10回教養講演会

演題：ゲルマン語学をめぐる ―比較言語学入門―

講師：河崎靖氏（京都大学人間・環境学研究所教授）

開催日時：令和3年11月24日（水）15時から16時30分

参加者数：48名（対面17名、オンライン31名）

内容：昨年コロナ禍で開催できなかった教養講演会を、今年度は京都大学大学院人間・環境学研究所から河崎靖（かわさき・やすし）教授をお迎えして開催することができました。

河崎先生は、ゲルマン語学がご専門で、よく知られたゲルマン民族の大移動に端を発した北部ヨーロッパの言語分布の3000年にも及ぶ変化を分かりやすく解説いただきました。

用例も具体的で、英語のappleが、オランダ語でappel、ドイツ語でApfelと言うという、ゲルマン語学の入門的な事項から、ドイツ語でも、「何」を表すwasが、実際には、”Wat is dat?”のように口語では言われ、オランダ語に近くなるなど、単に本で学ぶだけでは分からないゲルマン語のグラデーションも分かりやすくご解説いただきました。

ご講演の後半では、特にフランスのアルザス地方に焦点を当て、ローマ帝国とゲルマン世界の間にあった十字路アルザスにおいて、言語、宗教、文化がどのように醸成されていったのかということをご自身の滞在経験とともにお話いただきました。巨視的に、そして微視的に具体的な地域からヨーロッパ全土を見るというご講演内容は、岐阜大学の掲げる基盤的能力のひとつである論理思考・創造思考に大いに刺激を与え、また、グローバル社会における地域の役割を考えさせていただきました。

さて、今回の講演会には、学生さんも多く参加してくれました。私が今年度から全共で始めたロマンス語学全般を学ぶ講義「言語学入門 一緒に学ぼう！岐阜の方言と南欧の言語」の受講生は、ラテン語からのドイツ語への借用など、言語的・文化的な南北交流を知ることができヨーロッパ全体を俯瞰することができたと喜んでいましたし、また、ドイツ語の授業を取っている学生さんにも参加していただくことができました。まさに教員と学生がともに学べる講演会となったことは喜ばしいことでした。

有意義な時間を提供してくださった河崎先生に心からの感謝を申し上げます。（基盤教育センター長 山田敏弘）



アカデミックセントラル共催セミナーに参加して

令和4年1月13日（木）、岐阜大学と名古屋大学とで構成するアカデミックセントラルと、名古屋大学高等教育研究センターが共催するセミナー「**学生寮における教育的アプローチの開発とその課題**」がオンライン上で開催された。講師を務めたのは、この分野の第一人者である**名古屋大学高等教育研究センター准教授の安部有紀子氏**である。

学生寮と聞いた時、どのような形態なり運営なりを想像するであろうか。典型的なイメージとして、寮歌や自治といった言葉に象徴される旧制高等教育機関の寄宿舎を思い浮かべる人は少なくないだろう。

ところが安部先生によると、近年の学生寮は、従来のような、経済的側面から学生を支援しようとする福利施設から、教育的側面をより強調したものへとその性質を変化させつつあるという。今や、大学側が寮の運営に積極的に関与し戦略的に運営することで、大学における学生の学び（これは正課科目のみならず生活スキルを含めた広い概念）の質を向上させようとする意図が明確に表れるようになってきているようだ。

こうした変革は、日本以外の諸外国が先を進んでいるとのことで、セミナーではアメリカの事例が、安部先生が実際に渡米して行った調査に基づいて報告された。興味深く感じたのは、アメリカの一部の大学では、キャンパスにおける正課と学生寮における正課に関する共同学習、そしてリーダーシップトレーニングなどが地続きのものと捉えられ、一つの教育プログラムとして成立している点であった。紹介された事例は、今後の我が国の学生寮の在り方を考えるうえで非常に有益な内容であった。しかし一方で、学生の私生活の領域に、大学側がどの程度まで介入することが許されるのかという問いも生じた。

本学と名古屋大学が共同で開催するこうしたセミナーは、両大学の教職員はもちろんのこと、学生も参加可能であるので、今後はぜひ積極的に聴講して頂きたいと思う。（**廣内 大輔**）

全学共通教育 令和4年度からの変更事項

岐阜大学全学共通教育は、令和4年度から、以下のように変わります。

・社会人リテラシー科目（日本語表現，キャリア形成）の新設

社会に出てからも役立つ日本語力向上を目指す日本語表現科目と、卒業後に目指す社会人の姿を考えるキャリア科目を立ち上げます。なお、日本語表現Ⅰ（初級）科目は、令和4年度以降の全入学生必修の科目となります。

・数理・データサイエンス・AI科目（データ科学基礎・演習）の新設

社会の様々な場面で新しい価値を生み出す基盤となるデータ分析能力を身につけるため、文理を問わず最低限必要とされる基礎的な能力を育成するデータ科学基礎科目と演習科目を立ち上げます。データ科学基礎科目は、令和4年度からは一部の学部等で必修科目となりますが、令和6年度以降は全入学生必修を予定しています。

・言語と文化（現：第二外国語）の新設

これまで全員に2単位ずつ課していた第二外国語科目が、前期2単位の講義科目として再編されます。前期で英語以外の言語とその文化を講義形式で学び、その後、語学力を伸ばしたい学生のための演習科目を開設します（地域科学部の学生は前後期入替科目あり）。

・岐阜学科目（現：複合領域科目）の新設

令和3年度まで「複合領域科目」として、人文・社会・自然などの枠に捕らわれない内容で開講されていた科目の中から、特に岐阜を中心とした地域を取り上げて学ぶ科目を「岐阜学科目」としてまとめ、岐阜大学生に学んでもらう必修科目と位置付けました。

・「岐阜大学教養科目に係る「大学以外の教育施設等における学修」の単位認定に関する取扱規則」の一部改正

外部試験により優れた英語能力を有していると認められる学生に対する単位認定制度を拡充しました。令和3年度までの英検やTOEIC、TOEFLに加え、IELTSとケンブリッジ英検も単位認定の対象とします。さらに、各学部統一した基準に変更しました。

基盤教育センター（令和4年3月現在）

センター長 山田 敏弘 専門分野 日本語学
副センター長 瀨瀬 守 専門分野 化学
副センター長 廣内 大輔 専門分野 高等教育論
副センター長 橋本 智裕 専門分野 化学

岐阜大学 教育推進・学生支援機構 基盤教育センター

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL. 058-293-2169
email : gjea01008@jim.gifu-u.ac.jp
<https://twitter.com/GifuKyouyou>
<https://www.facebook.com/GifuKyouyou>

山田敏弘 橋本智裕 責任編集